

氏名（本籍）	楊帆（中国）
学位の種類	博士（国際文化学）
学位記番号	甲 国第 13 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
論文題目	中国考古学の特質
論文審査委員	主査 中園 聡 教授 博士（文学）九州大学 副査 大西 智和 教授 博士（文学）九州大学 副査 松本 直子 教授（岡山大学大学院） 博士（文学）九州大学

内容の要旨

楊帆氏は、論文 17 点、学会発表 16 回（いずれも共著・共同発表を含む）などの業績を有しており、当該博士学位請求論文（以下、本論文）はこれらのうちとくに関係するものを踏まえて作成されたものである。本論文の文字数は約 19 万字（図表を除く）にのぼっており、本研究科が基準とする 8 万字の倍以上の分量となっている。

本論文の構成は、7 編の基礎論文に書下ろしを加えて検討・考察を行った 5 つの章を中心とし、その前に序章、後に結語を置き、さらにその後に謝辞、文献を付している。内容の要旨については以下の通りである。

序章では、本論文の目的と特色が述べられている。楊氏は、本論文が中国考古学の特質について考察しようとするものであることを宣言し、それにあたり考古学の方法や対象は国や地域などによって一様ではなく、中国考古学も該当するとの認識に立つ。そして、中国考古学の特質の理解には、実態の把握や掘り下げた検討だけでなく、中国以外の考古学との意識的な比較の必要性を説き、本論の特色として以下 3 つの主要なアプローチの観点を挙げている。

1) 欧米考古学由来の理論や方法、考え方との比較に加え、同じ東アジアにあって中国とは少なからず異質な面をもつ日本考古学との比較も念頭に置き、その動向や影響を比較の観点から扱い相対化すること。その際、国外で紹介が少なかった中国の新しい動向を積極的に扱うこと。2) 中国考古学の研究動向について記述的把握だけでなく、これまで本格的になされたことがなかった、計画的に多数のデータを収集し分析することで客観化と説得力を強めること。3) 中国考古学で現在受け入れられていない研究法を試し、中国での著者の体験や見分も本論に織り込むことで、文献などからは把握しにくい中国考古学の実態に

についても接近すること。こうして、中国考古学の多角的な評価と新たな理解につなげることが企図されている。

第1章「中国考古学の流れ」では、中国考古学史について、理論や方法の根幹とも関係するとみられる外国考古学（欧米と一部日本も含む）からの影響に着目しつつ、第1節で以下の各時期に大別して、社会的状況や国際関係などのコンテクストに触れながらその「激動の歴史」が述べられている。1) 1920年代から1949年の「新中国」の成立以前、2) 「新中国」成立以後、3) 1990年代以後の3時期がそれであり、それを通じてユニークな中国考古学の形成過程が概説されている。外国考古学の影響を重視することについて、中国考古学の特質を考えるうえで何を導入し何を拒絶したかなど、その差を端的に理解しやすいという認識が示されており、実際にそれが中国考古学の形成に強く結びついてきたことが述べられている。さらに、中国考古学は、国家間の関係、国内の政治状況、国家の方針などのコンテクストに強く影響されてきたという見解が示される。

中国考古学は初期から欧米や日本の影響を受けてきたこと、「新中国」成立後しばらくソ連考古学の濃密な影響下で素地ができ、ソ連との政治的訣別や文化大革命などを経て独特な考古学が展開されたこと、さらに改革開放後、とくに1990年代には欧米考古学に接近するとともに、現在、経済成長と国家戦略を背景として顕著な発展を遂げていく流れが描かれている。

こうして近年は欧米考古学由来の術語や手法が多く導入されているが、第2節からは、民族考古学、ジェンダー考古学、認知考古学、パブリック考古学のそれぞれを節ごとに扱い、経緯・受容・状況を述べている。これらは欧米考古学に由来するか関係するものであるが、例えば近年盛んになってきたパブリック考古学については、欧米における考古学と現代社会との関係やポストプロセス考古学の思想潮流などとの縁の薄さを指摘し、「中国パブリック考古学」と呼ぶべき独特さをもつとする。このように、本来の理論と一体でない形での、ある意味で「自在につきはぎ」した導入が見られることが指摘されている。

第2章「中国考古学と型式学」では、考古学の基礎とみられることが多い型式学について章を設け、中国考古学での態度や実践について学史的および実践的な検討をすることで、さらにその特質に迫ろうとしている。型式学がとくに重要なものとして扱われ精神的に分類・編年に取り組みされてきた日本考古学とも対比しながら、章の前半では学史的・方法論的な検討を行っている。日本考古学にとっては不徹底・不満足ともいえる考古資料の分類・編年や、型式学軽視といえる姿勢が形成・定着したことについて、戦前の初期中国考古学では欧米・日本から型式学や層位学が導入され西洋流の考古学とさほどかけ離れてはいなかったが、民族意識や日中戦争による外国人研究者の撤退により自国民による調査研究が比較的早い時期から行われるようになったことに加え、「新中国」成立以降は型式学を「ブルジョワ的」として非難するソ連考古学の強い影響があったこと、さらに、前提となるマルクス主義的発展史観に考古学的解釈を当てはめる姿勢などを要因とみている。ただし、

日本考古学でもマルクス主義が優勢であった時期があるにもかかわらず、型式学的編年重視、伝播論・文化史で一貫していたことも指摘されており、単にマルクス主義かどうかというより、両国のたどった社会的・歴史的コンテクストの違いや、ソ連からの影響の有無など別の事情を考慮すべき旨も指摘されている。

章の後半では、日本考古学で特殊化してきた型式学的研究法のうち、型式学的仮説と層位的検証を意識しつつ、属性分析と多変量解析を中国東北部の新石器時代の土器に意識的に適用する試みがなされた。その結果、既存の編年より高解像度で集落遺跡の変遷をトレースでき解釈上も有効であると結論している。その上で、日本流の方法は優れているが、考古学研究を取り巻くイデオロギーや歴史的経緯を含むコンテクストなどが反映した中国流の考えも、多様な考古学という点からは否定し去ることはできないとする。ただし、現代では考古学者が自らの実践に対して他の考古学との自省的比較をすることも大切であり、現代の中国考古学でも方法の選択肢を増やして検討してみることは有益としている。

第3章「中国考古学における3D技術の適用」では、今日の中国考古学を理解するうえで近年顕著な新しい分析・調査手法のうち3D技術の導入とその実施・利用の状況が事例とともに紹介・検討されている。中国では、2000年以降に3D技術が文化財に適用されるようになり、考古学の様々な対象に急速に広がっていることが多数の事例を挙げて示される。また、21世紀初頭から見られるようになった関係論文は2010年を境に大きく増加し、2015年以降は技術分野など考古学以外の専門誌より考古学の専門誌での発表が盛んになったことを示すデータや、学位論文数の上昇を示すデータも提示している。調査現場での3D計測の機材・方法の高度さや、実施規模の大きさ、VRによる考古学バーチャル実験室を設けた考古学教育も開始されているなど、欧米と遜色のない数々の先進的取り組みがなされていることがわかる。しかし、それらはしばしば考古学者自身というより3Dの専門家との「分業」であり、そこにも中国考古学の特徴が出ており、保存・普及以外の考古学的問題解決への利用にはしばらく時間がかかることも示唆されている。

本章後半では、自身の調査活動や実体験などを述べ、中国考古学界での3D技術適用の実態について文献等で把握しにくい実情をカバーするよう努めている。3Dの普及は著しいものがあるが、国内の学界に遍くというより3Dへの基本的理解の程度など実際の対応にはばらつきがあることなども示されている。

第4章「中国考古学の研究動向分析」では、数量的把握に基づく本格的な研究動向分析に取り組んでいる。1955年創刊の『考古』（創刊時『考古通説』）掲載の2019年までの9,545件の記事に対して、490項目にわたるチェック項目を設定した膨大なデータベースを作成し、グラフ化やヒートマップによる通時的動向分析を実施して可視化しており、その結果、研究対象となる素材や時代、対象などに顕著な偏りがあることなど多くのことが判明している。その偏りは、イデオロギーや考古学への外国からのインパクト、歴史的脈絡・伝統、

文化的に形成された好みの体系が絡み合ったものと推定している。また、欧米と比較して、定着している理論的枠組みやパラダイムに挑戦するような提言や議論に欠けることも指摘されている。

研究対象となる地域が河南省とその周囲、すなわち「中原」に集中する傾向が明らかにされており、政治的・社会的状況の変動にかかわらず今日まで一貫していることが示されている。そして、それは「新中国」成立以前からの持続的傾向とみている。対照的に、周辺王朝・周辺民族を扱うものが少ないことなども見いだされている。さらに、実践レベルで文化史的・伝播論的傾向が強く、「歴史学としての考古学」が信念として一貫して保持されてきたことが指摘されている。

そうした持続的な傾向の一方で、中国と諸外国との政治的・文化的な関係の変化に対しては、それとよく連動して記事が変動しており、実践レベルで鋭敏に反応してきたことも明確化されている。また、政治的イデオロギーに関する記事をはじめ、ある期間で収束したものが抽出されている。さらに、欧米考古学の理論的枠組みは導入されないが、各種の先端技術は採用される傾向が強く、1990年代以降に顕著になったことも明瞭に示されている。とくに、中国の状況になじまないとみられるポストプロセス考古学はほとんど影響を与えておらず、思想潮流としてそれと本来関わりのあるパブリック考古学にも中国的な色彩が濃いこと、新しい動きであるジェンダー考古学も実際には少なく、まだ大きな展開を見せるには至っていないことなども論じられている。欧米由来の考古学理論については、理論・方法、考え方や態度までの総体として導入されないことが、第1章に続いてデータから確認されている。

第5章「中国考古学の特質」では、以上の検討を総合して、本論の目的である中国考古学の特質について、以下のようにまとめている。

①欧米考古学に由来する用語や技術を幅広く、総花的に採用することができ、そこには迅速性、徹底性、進歩性が見られること。しかし、ポストプロセス考古学の導入やそれ以降の考古学理論の本質的理解が進んでいないことが示すように、②無意識のうちにも、中国考古学に適合する方法とそうでないものを峻別する取捨選択が行われていること。これは非欧米諸国における日本考古学の場合とも非常に類似したところがあり、必ずしも政治体制云々とはいえない面があるとする。換言すれば、中国考古学はマルクス主義に基づく主たる理論が背景にはあるが、現在までの本質とその実態は、③伝統的な文化史的考古学に基礎をおいており、パラダイムの変更を伴うような理論的な変化には極めて保守的であること。マルクス主義的理論の枠組みが厳然として存在しており、それを含むメタ認知が行われにくいことも要因として考えている。さらに、④中国国内の政治的状況や国際関係の状況に極めて鋭敏に反応してきた過去をもっており、現在の状況からも、今後とも鋭敏である可能性が高いこと。これについては多かれ少なかれ他の国・地域の考古学にも見られる要素であるが、好むと好まざるとにかかわらず、政治との関係が特に密接な状況とな

って今日に至っているとし、当分の間、国外の考古学理論やその思想をフォローし対応していくことよりも、中国国内の考古学界を取り巻く状況が最も優先されていく可能性が考えられる――以上が本論文で到達したところといえる。

さらに、現在、中国考古学は国民の関心を集めるようになり、新発見のニュースや「パブリック考古学」的活動と相俟って、当面、国内向けには大きな成果を上げると予測している。しかし、これまでの外国考古学の影響から得てきた恩恵を中国考古学の独自性の中でいかにうまく咀嚼し、新たな価値を帯びた理論や方法、さらにそれに沿った価値ある実践法を創出し、それをいかに示していくかが大きな課題である、と述べている。

審査結果の要旨

1. 評価

楊帆氏は、論文 17 点（うち査読論文 3 点）、学会発表 16 回（ほとんどは全国学会で、2 回は国際会議）などの業績があり、本研究科の要件を十分に満たしている。これらは研究活動を継続的に実施してきた証左であり、課程博士として十分な業績があることを確認した。楊氏の業績で中国考古学の動向に関するものには、日本で初めて、あるいはまとめて扱った稀有な論文・発表として、学会でも評価を受けたものが含まれており、本論文にも盛り込まれている。本論文の文字数は、図表を除く約 19 万字にのぼっており、本研究科の基準を大幅に超える分量に仕上げられており、論文構成や論文形式上も問題がないものと認められる。

本論文は、中国考古学の特質の解明という課題について、新たな視点と方法からアプローチしたものである。楊氏もいうように、中国考古学は非欧米諸国・地域にあって、日本に次いで長期にわたって自国民が主体的に考古学の調査研究を実践してきた稀な例であり、その蓄積は膨大なものがある。そのようなある意味で難しい対象に対して、中国考古学の理論や方法、対象や考え方、さらには政治やイデオロギーとの関係をはじめとする諸方面を通時的に扱い、その特質を明らかにしようとしたところが本論文の大きな特徴の一つであり、それを欧米における先進的な考古学的コンテクストの研究とも比肩できると思われる優れた視点と分析方法によって成果を上げるに至っている。

中国考古学の成立初期から今日に至るまでについて、欧米考古学および日本考古学等との関係やそれらからの影響という観点から比較しており、ユニークかつ効果的な着眼点をとっていることは評価できる。また、近年の中国考古学における、ジェンダー考古学、認知考古学、民族考古学、パブリック考古学、あるいは 3D デジタル技術の適用などの新しい動向についても積極的に扱っている。それらの新しい動きは、中国以外でまとまった紹介がなされたものは僅少かほとんどないといってよく、知られるに至っていないゆえに未評価の分野といえるが、そこに取り組んだことも本論文の目的である中国考古学の特質を

明瞭にするのに大きく寄与しているといえよう。その意味で本論文を、現代中国考古学の実態を知るための貴重で価値ある論文と評価することができる。また、その検討結果についても、それらの新しい動向がしばしばプロセス考古学あるいは、特にポストプロセス考古学というパラダイムにおける理論やそれと関わるポストモダンなどの、恐らく受け入れがたい思想潮流とは切り離された形で中国考古学に導入されていることなど、興味深い指摘がなされている。

また、本論文では記述的分析だけでなく、多数のデータを収集し数量的に把握していることも大きな特徴であり、また重要な点といえる。特筆すべきは、論文 1 件あたり 490 項目にわたってチェックしデータベース化する作業を、『考古』誌掲載の 1 万件近い膨大な記事に対して完遂したうえで多角度から動向分析を行っていることであり、このデータベース化はこれまで何人もなしえなかったものを個人の地道な努力で成し遂げた「偉業」といふべきものであって、そのこと自体、賞賛に値する。その結果、対象が偏在すること、一貫した「中原」志向や、国家間の関係における変動が如実に研究動向に顕在化すること等々、中国考古学のハビトゥスともいふべき様々な傾向が明らかになったことも高く評価できる。かくして明らかにされた諸現象は一定の説得力を有しており、全般的に、中国考古学に対するマルクス主義、政治性、民族主義といった外部からのステレオタイプというべき評価を超えるものとして、本論文の価値は高いといふべきであろう。なお、この膨大なデータベースについて、多変量解析などさらなる統計解析を行う余地があると思われるが、本論文においてはひとまず十分といふことができ、今後の研究に委ねられるべきであろう。このデータベースに対しては、今後も様々な視点から多様な分析を行うことで豊かな情報を引き出すことができるとみられ、将来性のあるデータとして貴重である。

型式学的研究法については、日本のように原理に忠実かつ独自の発展を遂げ、それに強く依存するものと、欧米のように原理を理解しながらも必ずしも重視せず、層位学や年代測定による外的指標への依存を強めているものがあるが、日本はむしろ特殊な例である。本論文で楊氏は、日本式のをあえて中国の素材に適用することで立論に一定の成果を上げているが、そのうえで方法の多様性を知るべきであると説いている。中国では学史的経緯と一時期のソ連考古学の強い影響で型式学を拒絶する傾向が強いことが本論文で触れられ、その傾向がその後も一貫して持続していることが明らかにされているが、このことは、型式学的思考・実践を当然のこととして実践してきた日本の考古学者に一定の衝撃をもって受け止められるとも考えられる。その刺激にどのように対応するかは日本考古学にとっても重要な課題となりえるものであり、そのような点を考慮すると、なおさら楊氏が本論文を通して実践した国際的な比較の観点は重要なものといふべきであり、それを日本語で著したことにも大きな意義があるといえよう。

このような試みに加え、文献等から拾えない情報も自らの調査経験等から回収し、より正確な評価をしようと務めていることも評価できる点である。さらに Shanghai Archaeology Forum などの新しい動向の把握にも努めており、その姿勢も本論文中で有効

に働いているといえる。なお、本論文では学史的検討だけでなく、上述の型式学的研究方法の実践やその中の属性分析や多変量解析、あるいは SfM-MVS による 3D 技術の適用なども自ら実施していることが示されており、そこに表れているように楊氏は考古学における手法においても自ら実施できる技能と見識を持っていることが確認される。

また、世界の多様な考古学 (archaeologies) のあり方については欧米諸国を中心に議論や認識が深まっているが、そうした背景も考慮されていること、さらに中国考古学の「特殊性」が単に歴史的・社会的コンテクストの差だけでなく、より根本的な考古学の存在理由に関係していることも読み取れるところである。本論文中の議論の随所にも見られるが、研究上の洞察力も身に付けていることがうかがえる。

なお、本論文については、図を最小限に絞っているが、理解の助けとして増やした方がよいのではないかという意見が出た。また、本論文でも指摘されたように中国では欧米あるいは日本への留学から帰った研究者が増えているにもかかわらず、表面的変化はあっても学界の本質部分はなぜ変化しにくいのかという点について、「学問の再生産」の構造に着目し、大学内部の構造や教育のあり方などを分析してもよく、またジェンダーについても大学教員の男女比や、大学や学界で影響力のあるポストの男女比を出すことも重要となろうという指摘があり、意見が交わされた。ただし、これらは今後の課題として取り組むべき事柄であり、現段階でも本論文は十分なレベルに達しているといえる。

本論文はユニークな観点から、表面的ではない中国考古学の特質を、説得力をもって抽出できているというべきであり、博士号取得に相応しい水準の内容と完成度を備えた優れた研究として評価できる。したがって学術的寄与が期待でき、学界への影響についても、今後中国考古学や他地域の考古学について類似した研究が行われるとすれば、方法論の上でも本論文が参照されることが期待される。

2. 結論

本論文は、以上のように独創性と新規性に富み、優れた研究のための研究デザイン能力と遂行能力によることを示しており、国際比較から相対化する能力に優れ、柔軟かつ鋭い洞察力をもつに至っていることが認められる。今後の発展・展開の可能性もあり、将来性のある研究といえる。さらに、業績等の書類による審査、口頭試問による最終試験、論文公開発表会を通して、本研究科の博士後期課程を修了し自立した研究者として活動するに相応しい外国語能力、専門知識と幅広い関連諸科学への知識、学力、見識等のいずれについても優れたレベルに達していることを確認した。また、本論文および業績等が示すように、優秀な研究者として今後の活動が期待される。なお、本論文の重要性に鑑み、書籍等での出版も検討するよう勧めるものである。

以上、「研究者としての自立性」、「専門研究の独創性」等の本研究科における博士の学位授与要件を満たしていると判断する。本委員会は全員一致で、楊帆氏は博士(国際文化学)の学位を授与されるに値すると認めるものである。